鹿の食害からかろうじて守られる

剣山のキレンゲショウマ (徳島県東祖谷山村　剣山)

平凡社の「日本の野生植物」によれば、キレンゲショウマ属は、東京大学の初代植物学教授・矢田部良吉が、1890年(明治23)に日本人として最初に発表した属で、和名をそのまま学名とした。そして、文献によれば、発見は1888年(明治21)8月9日、石鎚山で矢田部自身が採集したと記録されている。

矢田部良吉は、29歳で、木曽駒ヶ岳でヒメウスユキソウを発見した人物として知られる。37歳でキレンゲショウマ発見とされる年、トガクシソウをめぐって、「破門草事件」を起こし、2年後には、牧野富太郎を、東大植物学教室に出入り禁止にする等、何かと問題を起こしていた人物である。

ところが、キレンゲショウマの発見は、7日前に、別の人物によって発見されていた事が判明している。その経緯を見てみよう。

最初に発見したのは、吉永虎馬という人物。1888年(明治21)8月3日、彼はこの時若干18歳で、明治初年に開校した徳島県・海南学校の生徒であった。先生と生徒等何人かで石鎚山登山をしていた。泊まったのが、石鎚山最高峰の天狗峰の北側稜線にあった堀切小屋(現在はない)。水を汲みに小屋の下方100mの沢に下った時、見慣れぬ黄色い花が群生しているのを発見したのである。数本を採集して小屋へ持帰った。ある程度植物を見慣れている者ならば、キレンゲショウマを初めて見た時、どの植物とも違う事を瞬時に見抜ける。それ程、珍しい形をした花なのである。

吉永虎馬は、同じ高知県佐川町出身で、一回り年上の牧野富太郎とも親交があった人物。徳島県では、明治中期にも関わらず、植物学に関心が高かったのである。

発見と同じ日、中央から石鎚山へ植物採集を目的に訪れていたのが矢田部良吉一行であった。ところが、豪雨のため、石鎚山登山宿駅であった池川町で足止めをくっていた。この情報を知った虎馬は、下山途中、かの未知の植物を矢田部に鑑定を依頼したのである。驚いた矢田部は、これはレンゲショウマの一種であろうとの見解を示し、キレンゲショウマとでも言ったらよいとの回答であった。これが後の和名となる所以である。

その後、矢田部一行は虎馬も同行して石鎚山へと向った。ところが、石鎚山北側へは随分の難所で行かれず、手前の筒上山から沢に分け入った場所で同じ植物を発見したのである。これが、矢田部自身が採集した標本である。2年後に虎馬が秋に登って果実期を採集し、二つのタイプ標本を示して、論文を記載し、学名を付けたのである。現在、虎馬採集の標本は現存しない。

虎馬は、後に菌類研究家として知られ、日本におけるコケ類研究の先駆者となった。又、徳島県の那賀川周辺に咲くナカガワノギク発見者としても知られている。牧野富太郎とは深く交流があり、陰で支えていたのが虎馬であったと言われている。

余談になるが、筆者が剣山でキレンゲショウマの撮影をしていた時、たまたま訪れた中年のご婦人方がくすくす笑っていた。何が可笑しいのか解らず、この話を後に花の知人にした。「知らないのか?」と、言う。聞けば、宮尾登美子の小説「天涯の花」で、ヒロインの剣神社の巫女・平珠子が、東京からキレンゲショウマの撮影に来た妻子あるカメラマン久能を救助する。彼との不倫の話だという。なる程と納得したものである。

2010年の剣山取材時、山頂の山には笹と有毒なトリカブト以外の植物は見られなかった。鹿の食害によって、植物は食べ尽くされていたのである。キレンゲショウマの群生地は網で囲われ、生延びていた。これに温暖化が加わると、どうなるかは解らない。